

追憶 古畑正秋先生

田 鍋 浩 義*

11月23日の朝、御殿場の病院に古畑先生のお見舞に行くつもりで支度をしていたら、お嬢様の久仁子さんから「今朝6時52分に亡くなりました」という電話があった。おどろいて、とりあえず数カ所に緊急連絡をし、急遽ご自宅にかけつけた。2年ほど前から健康を損われて、入退院をくり返しておられ、ときどきお見舞に伺っては心配していたところであった。先生は前夜までご機嫌も良く、ご家族とお話しをされていたが、夜明けにパンの小片をおいしく召し上った後、急にお亡くなりになったそうである。急性心不全であった。

私は古畑先生に40年近くお世話になった。今こうしてお別れをしてみると、数限りない追憶がつつぎと浮んでくる。そのうちのいくつかを思いつくままに記して、先生のお人柄を偲び、哀悼の意を表したいと思う。

私が古畑先生に初めてお目にかかったのは、1949年に天文学科の前期学生（旧制東大理学部では1, 2, 3年生を前, 中, 後期学生と呼んだ）として、当時港区麻布にあった天文学教室で、先生の「観測整約法および球面天文学演習」の講義を聞いたときである。手廻し計算機による最小自乗法の解法、セオドライトや六分儀の使用法等々を教わった記憶がある。しかし何より嬉しかったのは、金曜が祝日の場合、土曜日の先生の講義が休講になったことである。後で聞いた話だが、先生はこの3連休を利用して伊豆の八幡野に大気光や黄道光の観測に行かれ、かたわら釣りも楽しんでおられたようである。先生の釣り好きは東京天文台では有名で、永年のご在職には多くの職員が釣りに連れて行ってもらい、手ほどきを受けている。

先生は、ハーバード大学天文台滞在中に、当時アメリカで始まった光電観測という新技術を習得して帰られた。それで、私も東京天文台に就職して古畑先生の研究室に入れてもらってから、まず変光星の光電観測を習った。戦争の荒廃から修復した65cm望遠鏡に、やっと手に入れたRCA 1P21光電子増倍管をとりつけ、出力をガルバノメーターで読みとるという方法であった。そのころ先生は本郷にお住いで、観測の日は天文台の合宿（独身寮）に泊られて、お天気待ちによくポーカをやったものである。当時東京天文台にあった「塔影」という文芸同人雑誌に、こんな人物評が載っている。

ふくみ笑いの男ぶり
るんばトロット何でも来い
はーバード仕込みのジェントルマン
たまの休みはスイートホーム
まだムのピアノに調子を合せ
さけを飲み飲みおどります
あすは観測 合宿の
きたないフトンで淋しいな

ちなみに、奥様はピアニストで、後に三鷹の官舎に移られてからは、お宅でよく演奏を聴かせて頂いたり、興が乗れば先生が「波浮の港」や「串本節」などを奥様の伴奏で歌われた。なお先生のトレードマークであったパイプは、ハーバード時代に始められたと聞いている。

1955年にセイロン（現スリランカ）からベトナム、フィリピンにかけて最大級の日食があり、日本からも戦後初めての海外観測隊をセイロンに派遣した。不運にも曇天のために観測は不成功に終わったが、先生は観測隊長として隊員をよくまとめられ、現地の人からは「ビッグ・マスター」と呼ばれて親しまれた。そのときのエピソードは、当時の天文月報（1955年9月号）に書いたが、いま読み返すと本当になつかしい思い出である。

1957～58年の国際地球観測年では、先生は大気光・オーロラ分野の責任者として内外の観測網を組織され、国内に多くの大気光研究者を育てられた。そのとき、先生のご指導で製作した大気光自動掃天測光器は、「天文台で一番おもしろい器械」と評されたほどで、同型のものが全国の観測網で活躍したが、オクラ入りをした現在でも、スイッチを入れると正確に動いている。

1968年、大学紛争の最中に東京天文台長になられ、ますます忙しくなられた。会議々々の連続で、その間には台内外の人がいろいろな用件で面会、報告、打合せに来る。測光部長も兼ねておられたが、私などは同じ測光部員でありながら、なかなか古畑部長がつかまらないこともあった。それでもときどきは「今晚一杯やろうや」と誘われて、同僚と官舎にお邪魔することがあった。ハッキリとは云われなかったが、そんなときは大てい、昼間に難しい会議などがあった後で、やはり先生も息抜きを求めておられたようである。

1973年に退官された後は、空の澄んだ静岡県御殿場に居を移され、広い庭にスライディング・ルーフ付の望遠鏡3台を据えつけ、主に変光星の写真観測を始められた。週に1度、文献調べに東京天文台に来られても「今日は晴れているから観測がある」と急いで帰られることが多かった。望遠鏡や測定器にも、いろいろと古畑流の工夫が施してあり、毛布を改造した観測用防寒着を「古畑正秋設計、古畑久仁子製作」といって自慢しておられた。この時期は先生にとって、激戦から解放されて思う存分、大好きな天文観測ができた最も楽しい日々であったと思う。撮影された写真は2万枚を超え、ときどきIAUの変光星委員会報に報告を出しておられた。もっともずっと永い間、観測を楽しんで頂きたかったのに、本当に残念である。

古畑先生の告別式は、ご生前のご意志により無宗教で行われた。大自然を愛され、大自然のもとにお帰りになった先生にふさわしいものであった。

安らかなお眠りをお祈りする次第である。

* 国立天文台